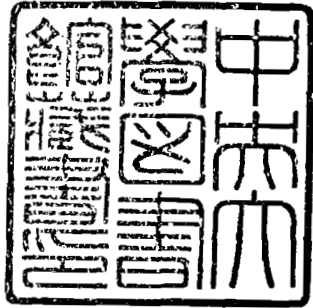


社会学の社会学

ピエール・ブルデュー 田原音和・監訳

安田 尚
佐藤 康行
小松田 儀貞・訳
水島 和則
加藤 眞義



questions de sociologie

pierre bourdieu

凡例

- 一 本文中、「」の部分は訳者が付け加えた補足である。
- 一 原文イタリックの箇所のうち、著書・紙誌名および絵画・映画等の作品名は「」で、論文は「」で括り、それ以外は原則として傍点を附した。但し、本来の意味の強調ではなく、フランス語以外の言葉が単にイタリック表記されているに過ぎない場合には、傍点を省略した箇所もある。
- 一 訳註は、各章ごとに(1)、(2)……の数字で示し、近接する奇数頁の左端に配置した。原文には講演・対談である性質上、それが行われた年月・場所、対談の相手、初出の誌・紙名などを除いて、原註はまったくない。
- 一 原文の「」は「」に、「」は「」に置き換え、「」はそのままとした。
- 一 注意を要する訳語に対しては、原語を併記するか、または原語のルビ(振り仮名)を振ったものがある。
- 一 全体をIからIVまでのパートに分けてそれぞれ標題を附したのは訳者であって、原典にはない。

プロローグ

私はここに再録されたテキストに先立つて長々とした序言を書こうという気になれないでいる。これらのテキストはいずれも口頭で語ったことを、しかも社会学の専門家以外の人びとにむけられた話を編集したものである。しかし、いくら平易ではあるものの、あまり完全とはいえない形で、ともかく公刊したほうが役に立ち、そのほうがいいと思つた理由を、少なくとも述べておく必要があるようだ。ただし、ここで取り上げた話題のいくつかは、これまでに私が他の機会に、おそらくもう少し少し厳密にかつ完全な仕方を取り扱ってきたテーマで取り上げてはいる。

社会学は少なくとも次の一点で他の諸科学とは異なる。それは近づきやすさが求められているという点であって、物理学にはもちろん、記号学や哲学にも求められたりはしないことである。しかし、難解さを託つこともまた、おそらくは、ぜひ知っておいたほうがいいと予感した事柄をともかく理解しておきたいとか、必ず理解したいとか、そういう気持をあらわす一つの方法ではある。いずれにせよ、「専門家の権力」や「専門的能力」の独占が社会学の領域以上に危険で、許しがたい領域は、おそらくない。いわんや社会学が専門家だけに任された専門的知識でなくてはならないとしたら、それは一時間の苦勞にも値しないだろう。

私は、どんな学問といえども、社会学ほど明確に社会的な賭けにコミットする科学はないなどと、いまさら繰り返して言うつもりはない。この学問の言説の生産とその伝達をことさら難しくさせているのは、まさにそのこと

だからである。社会学はさまざまな利害、ときには死活の利害にかかわる。だが、人は経営者や司教あるいはジャーナリストを頼って、実は彼らが支配するための隠された土台を暴く仕事の科学性を褒めてもらったり、そんな仕事の結果を公表するのに躍起になって、当の彼らに頼みこんだりすることができるはずはない。そもそも権力（世俗的であれ精神的であれ）が授けたがるような学問的正統性の免状をありがたがるような人たちは、一八四〇年代に、あの産業家のグランダンが議会の壇上で、児童の雇用はときに寛容の徳行だと言つてのけた「真の学者たち」に対して、感謝を惜しまなかつたことを知つておかなければならない。われわれのうちには、いつもこのグランダンや「真の学者たち」がいるものである。

それに、社会学者は、自分が学んだことを広める努力をするさいに、当節流行の課題、たとえば「暴力」とか「若者」、「麻薬」、「宗教的なものの復興」などについて、いまではリセの生徒に課せられる小論文の主題にも取り上げられ、またあながち誤つてもいない言説を、毎日、毎週、制作することをひたすら仕事にしている人たちをあまり当てにすることはできない。にもかかわらず、社会学者は自らの知見を広める務めを果たすさいに、他から大いに助けてもらう必要がある。というのも、真のイデーのもつ本質的な力といったようなものがあるはずはなく、この学問の言説は、まさにそれがヴェールを剥ぐ力関係のなかにそれ自体がとらわれているものだからである。また、この学問の言説の普及については、文化の普及法則に従わざるをえないが、しかし、その法則そのものを明確にするのもこの言説なのであり、学問的言説をわが物とするのに必要な文化的能力をもつ者（読者）が、この言説をわが物とすることに最大の利害関係をもつ者とは限らないからである。要するに、声高に語る人たちが、政治家、エッセイスト、ジャーナリストらの言説に対抗する闘争において、社会学の言説はこれらの言説に全面的に対立しているということだ。しかし、科学的言説を彫琢することの難しさと、どうしても遅れをとるといふことが、大抵は戦いが終わったあとにそれを登場させることになってしまうのである。この言説のもつ不可避的な複雑さが、

短絡的な人たちや先入観をもつた人たち、あるいは、ただ単にその複雑さを解説するのに必要な文化資本をもたない人びとを落胆させやすい。しかも、この言説のもつ抽象的な非人格性は、自分をそれと同一視し、自己をそこに投影して心を満たそうとする試みをことごとく挫折させ、既成の観念や当初からもつていた信念に対してこの言説の取る距離がなおのこと突き放してしまうのである。こういう性格をもつこの学問の言説に何か現実的な力を与えようとすれば、この言説を何としても必要不可欠なのだと思つてくれる社会的な力を、自らの上に蓄積することができる限りにおいてのみである。社会学の言説に求められていることは、一見して矛盾と見えようが、そのゲームの仕組をこの言説が明確にする（あるいは告発する）社会的ゲームに参加することを引き受けるということである。さまざまな社会的ゲームに参加することを引き受けるとはどういうことかと言えば、知的流行のそれこそメッカにおいて、その流行のメカニズムそのものを浮かび上がらせるように試みること、知的マーケティングの諸手段を利用してみること、ただし、普通ならこれらの手段は、とりわけこうした知的マーケティングの働きやその平常の利用者たちの働きを隠蔽するものだが、そのことさえもこれらの手段で伝達させるように活用すること、さらには、共産党の知識人むけ機関誌のなかで、党と知識人たちとの関係の仕組を浮かび上がらせるように試みること、等々がそれである。以上のことは、妥協したのではないかという嫌疑をあらかじめ甘受した上で、知的権力に対して、妥協が語られるその場で、相手が最も聞きたがらないこと、おそらく最も予想外のこと、その場に最もそぐわないことを語るることによって、知的権力の武器を逆手にとるべきだ、ということである。そのことはまた、自分の公衆が聴きたがっていることしか語りかけないという理由だけで人びとの耳目を引く月並みな言説がやる「改宗すみの者への説法」のようなやり方をきっぱり拒絶することである。

* 読者がさらに先へ進んでいただけるように、各章文末で、私の著作をその都度案内しておいた。

1 言葉に抵抗する技術

一般市民が文化¹と教養について話をする場合、文化に対する関心は損得とかかわりのない無私無欲なものだと示そうするむきがあります。ところが、あなたは反対に、一見利害とはかかわりのないこの関心が、さまざまな利潤を得させるものだということをあらわにしてみせましたね。

逆説的なことに、知識人たちは経済主義²を得をしているのです。この経済主義とは、あらゆる社会現象、とりわけ交換の現象を経済的な次元に還元してしまうことによつて、自分たちがそれに巻き込まれないですますことを許してしまうところがあります。文化資本(cultural capital)などというものの存在を改めて言ってみなければならぬのは、まさにその理由からです。この文化資本こそは、いうまでもなく何よりもまず学校市場において、ついでそれ以外の機会でも、直接の利潤を得させてくれますし、さらにはその稀少さということから、つまりは誰にも平等

『ディスタンクシオン』¹をめぐって、デイデ
エ・エリボンとの対話。『リベラシオン』²紙、
一九七九年十一月三、四日、一二〜三ページ。

に分配されていないという事実から、自動的にもたらされる卓越性(上品さ)という利潤——それは奇妙にも限界効用学派の経済学者たちからは忘れられてしまった利潤——を引き出すものだということだ。

だから、文化的な慣習行動とはつねに「並の」ものや「たやすい」ことに対して距離を置くこととする戦略なのであり、あなたが「卓越化」(他に対して差をつけようとする)「戦略」と呼んでいるのもそれですね。

文化的慣習行動というのは、そもそもそうあろうと心がけなくたって、ほかのものとは区別し、他とは区別されたものなんですね。「卓越化」ということの広く流布した定義では、際立とうという狙いなんかなくとも、月並みなことやありふれたことから識別される行動を「卓越したものと」呼べることです。文化的なことについて最も「ペイする」戦略とは、自分でも戦略のつもりなんかなくような戦略なんです。その戦略とは、好きでなければならぬものを好きになること、あるいは、その都度、まるで偶然のようにそれを「発見する」ことにあります。卓越化の利潤とは、月並みなことからは遠く隔たった差異、格差がもたらす利潤なのです。しかも、この直接の利潤には、主観的であると同時に客観的な追加利潤、すなわち無私無欲の利潤が伴います。つまり、利潤などは求められない、完全に利害とは無縁のものとも自らも思い、またそう思われてもいる利潤です。

もし、文化的慣習行動とはすべて距離を取ることにあるとするなら(あなたはプレヒト流の異化効果⁽⁴⁾というのは民衆から距離を取ることだとさえおっしゃっていますね)、万人のための芸術、万人が接近可能な芸術というような考えは無意味でしょう。すると、こうした「文化的 Kommunismus」などという幻想こそは、まさしく告発されなければなりません。

しかし、私自身、その「文化的(あるいは言語的) Kommunismus」の幻想に加担してきたんですよ。(私も含めて)知識人は、芸術作品に対するかわり方とは、稀少性などとは無縁な天下の共有財産に神秘的にかかわることだと、ひとりで思ってしまうものです。私の本のねらいは、芸術作品の鑑賞には、それなりの道具が必要ですが、その

道具たるや万人に等しく分配されてはいないものだ、ということをおもひ起こしてもらうことにあります。ですから、これらの道具の持ち主は卓越化の利潤、これらの道具が稀少であればあるほど大きな利潤、を約束されるわけです(たとえば前衛芸術の作品をわがものとするのに必要な道具のように)。

あらゆる文化的慣習行動、あらゆる趣味は社会的空間のきまった場所に格付けすることだとすると、対抗文化も、ほかの文化的慣習行動と同じように、他に差をつける活動だということを認める必要がありませんか。

対抗文化と呼ばれているものをどう理解するかが問題でしょうね。定義上、大変難しい、そもそも定義することが不可能な問題です。対抗文化にもいろいろありますが、それらはすべてはみだしたものの、エスタブリッシュメントとはまったく無縁なもの、公認文化の外にあるものです。初めのうちは、こうした対抗文化は、何かに対抗することです。自らを規定するところから、否定的に定義されることがよくありました。たとえば、私が思い浮かべるのは、漫画のような、「正統」文化以外のものなら何にでも傾倒するといったことがそれです。だが、それだけじゃありません。人は文化そのものと文化的利害とを分析しようとしてもしないで、文化の外に踏み出そうとしないのです。そういう例をあげることは簡単です。たとえば、エコロジストふうの話——「ハウストレーラー」や「自転車のフリーホイール」の愛用とか、「緑の遠出」とか、「はだしの芝居」とかいった話——のなかには、もうそれだけで「地下鉄・

(1) P. Bourdieu, *La distinction, Critique sociale du jugement*, Ed. de minuit, Paris, 1979, 石井洋二郎訳「ディスタンクシオン——社会的判断力批判I・II」藤原書店、一九九〇年。

(2) Didier Erison, 現在「ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」誌の文芸欄担当記者。G・デュメジル(一九八七年)、C・レヴィ・ストロース(八八年)との対談集を刊行。最近著に伝記 *Michel Foucault, Flammarion, Paris, 1989* がある。

(3) *Liberation* 一九七三年サトルの指導下で発行された日刊紙。当時マオイスト的傾向をもつが、のちに思想的に分裂し、財政難もあって一九八一年二月に休刊。同年五月に再刊され、よりクラシックな傾向となる。

(4) *La distanciation brechtienne* プレヒトの演劇理論の用語。俳優が役柄に同化してしまわないで、距離を置くこと(異化)によって、舞台と観客との間に批判的な意識が醸成できるようにすること。

仕事・ねんね」〔無味乾燥な地下鉄通勤族の日常〕や、「月並みな小市民たち」の「羊の群れのような」ヴァカンスに対して、差をつけ、鼻で嗤う当ててこすり一杯詰まっています（ことごとく引用符を使わなければならないくらいですが、実はそれがきわめて重要なのです。この括弧は公認ジャーナリズムの用心深い距離の取り方を示すためではなくて、分析用語と日常用語との間の隔たりをあらわすためだからです。ここでは、以上すべての言葉が卓越化のための闘争場裡における闘争手段であり、武器であり、賭け金なのです）。

そうすると、その「はみだし」とか異議申し立ての運動とかは、既成の価値を覆すようなものではないという事ですか。

もちろんですが、私はいつも別の方向にねじまげることから始めます。つまり、はみだし者、社会的空間の外なる者であろうとする人びとも、結局はみんなと同じように社会的世界のなかに位置づけられているのだ、ということに立ち戻ることから始めるのです。そういう人たちの「社会を翔んでる夢」と私が呼んでいるものは、社会的世界のなかで中途半端な位置をほとんど完璧にあらわしています。たとえば「新しい独学者たち」を特徴づけている位置がそれです。彼らはいい齡になるまで文化「教養」に対して「洗練された」かわりを身につけておこうと学校に足繁く通ってはきたものの、そのわりには学校の資格を手に入れもしなければ、自分たちの出自に由来する社会的位置からすればもっていてもおかしくない学歴を取ることもしない、といった連中です。

それはともかく、象徴的次元のあらゆる異議申し立て運動は、当り前だと思われていることを問題にする、問題外のこと、異論をはさむ余地のないことを問題にするからこそ、重要だということなのです。自明の事柄をひっくり返すのは、こうした運動なのです。「六八年五月」の例がそれでした。最近では、フェミニスト運動がそれです。それを「ブルジョワの女連中」の仕業だと言ったりするから、片が付かないのです。こういった形の抗議が、よくあるように政治運動や組合運動をかきまわすとすれば、おそらく、それが組織の中枢部の人間の底深い性向や特有の利害に逆行するからでしょう。ですが、こういう邪魔が入る主な理由は、被支配階級を政治化すること、彼らを政治的に動員することが、ほとんどつねに家の内なるもの、私的なもの、心理的なものにあらがつて克ちとらなければならぬということを経験しているのに、組織幹部たちは、消費とか女性の労働とかの家の内なるものを政治化することを狙った戦略をそう簡単にはつかみきれないからです。しかし、それには根氣のいる分析が必要でしょうけど……。いずれにしても、芸術や家庭生活など、社会的慣習行動の全分野を政治的省察の外に放つたらかしてきたおかげで、人は内に抑圧されたものの途方もないぶり返しに身をさらすことになるわけですね。

そうすると、はたして真の対抗文化というものは存在するのでしょうか。

ご質問にお答えできるかどうか分かりませんが、私が確信するところでは、文化的支配から身を守るために、あるいは文化によって、および文化の名において行使される支配から身を守るために、必要な武器をもつこと自体が文化の一部を形成しなければならぬはずだということです。そこで本当に問題になるのは、既成の文化に対して距離を取ることができる文化、それを分析できる文化なのであって、既成の文化を逆にする、あるいはもつと厳密に言えば、既成文化の逆転した形を押しつけるような文化ではありません。こんどの私の本が文化に関する本であり、対抗文化の本であるというのは、この意味においてなのです。もつと一般的に言うると、私は、いろいろソフトな形をまとう支配に対抗して、進歩した形の動員、つまりは、多くの場合、支配的イデオロギーのいわばエセ科学的な合理化作用にもたれかかった新しいプロのイデオログたちの柔らかい暴力に対抗して、さらには物理学や経済学といった科学を——ここで進歩した形のラシズム（人種階級差別主義）、つまり高度に遠廻しな言い方をしてラシズムを支える生物学あるいは社会生物学をひきあいに出すまでもありますまい——あるいはその科学の権威を政治的に使うことに対抗して、真の対抗文化こそがこうした抵抗の武器を授けなければならないだろうと考えています。要するに、象徴的支配に対抗して自衛のための武器の分散配置と普及をどうしても確保することが、何より

大事なのです。そのことはまた、私がいま言ってきたばかりの筋道からすると、現にまかり通っている文化の定義、政治文化の定義では排除してしまうことになるたくさんの事柄を、どうしても政治的たらざるをえない文化のなかに含めなければならぬ、ということになりましょう。そして、私はといえば、いつの日か、あるグループがこのような文化の再構築の仕事にとりかかってくれる見込みが必ずあるはずだと思っております。

あなたが知識人たちの心の内に、ことさら「罪悪感」「フロイトの言う「罪責感」や「良心のやましき」(「ニ・チエ」といったものを作り出させたくないと思っておられる点を強調する必要はありませんか。

個人的には、その「罪悪感」とか「良心のやましき」とかを作り出そうと狙っている人たちを、私は嫌悪します。いたずらに罪悪感を植えつけるような聖職者風のゲームを、とりわけ知識人たちを使ってやりすぎたんだ、と私は思っております。そうした「罪悪感」を、悔い改めるふりをしたり、公に懺悔したりして、いとも簡単に清算できるのですから。私はといえば、知識人をも対象からはざさない分析用具を作り出すことに役に立てばいいと願っているだけです。私は、知識人の社会学とは、知識人が必ず行う社会的世界についてのどんな理解にとつても、一つの前提要件なのだと思います。知識人たちが、自らの「ブルジョワ的性格」を自己批判するのではなく、自分たち独自の知的実践とその知的所産とをこうした社会学批判に付してきたのであれば、自分たちに対してあらゆる装置が罪悪感を植えつけようとして行使するさまざまな戦略に対して、十分に抵抗する備えが整っているはずです。これらの装置は、知識人が知識人である限り、その装置のためになしうることをなす、とりわけそれに逆らってなしうることをなすことを妨げようと狙っているものです。

ところで、あなたの分析、たとえば労働者階級の生活様式のなかでの男らしさの価値の位置づけのような分析が、労働者階級至上主義を補強することになる恐れはありませんか。

ものを書くときに、私はあれこれよく気苦労しますがね。大抵は読み違いされるのじゃないかという心配です。

人からはよく悪口を言われるのですが、私の文章の一部の複雑さの理由がそれなんです。読み違えられることが予想できると、あらかじめそうされないように努めてみるのですが。括弧や、ちよつとした形容詞や、引用符などのなかに警告をそつと差し込んでみますが、その必要がない人しか分かってもらえないようですね。それで、複雑な分析の場合でも、邪魔にならないよう必要最小限にとどめておくのです。

それはさておき、私の意見では、労働者階級における男らしさの価値をはつきり記述しておくことが重要だと思えます。知識人たちによく理解されていないことが多いのですが、それは他の事実と同じようにれつきとした社会事実なのです。ほかにも理由はありますが、とりわけこの価値は、身体の内、つまりは無意識の内に刻み込まれており、労働者階級の多くの行動やそのスポーツスマンたちの行動の理解を助けるという理由があるからです。いうまでもないことですが、労働者階級の暮しぶりやその価値体系を、私は一つのモデル、一つの理想像として提示しようというわけではありません。私が男らしさの価値や、体力に対する執着を説明しようと試みてゐるのは、たとえばそれが、自分の労働力しか、いざというときには自分の戦闘力しか当てにできない人たちのやり方なのだ、ということをはつきりさせようとするためです。また、労働者階級に特徴的な身体へのかかわり方が、さまざまな態度や行動や価値の全体の根源にあるということ、それはまた、話し方や笑い方、食べ方や歩き方もも理解可能にするということ、それを明らかにしてみようと試みているのです。私にとつては、男らしさという想念が被支配階級としてのアイデンティティの最後の隠れ家の一つだということです。そのほか私は、広告業者や婦人雑誌の記者、貧者のための精神分析家、結婚カウンセラーといった人たちが、日がな一日吐き出しているあの新しい精神療法がもつ効果、なかならずその政治的效果を明らかにしてみたいと試みています。だからといって、私はこの男らしさの価値やその使い方を称揚したがつているわけではありません。その使い方というのは、兵役にむいた体格のいいやつ(知識人に魅了するような恐怖感を抱かせるジャン・ギャバンやビジャール將軍⁵ふうの)を称讚したり、ある

いは分析の手を払いのけ、悪くすると分析を沈黙させてしまう気のいい男つぶりや、ざつくばらんな物言いに見られる労働者階級至上主義の使い方を指します。

被支配階級は、卓越化の戦略のうちでは消極的な役割しかもたない、いわば「引立て役」でしかない、とあなたははおっしゃいますね。そうなると、あなたにとって「民衆文化」というものは存在しないのではありませんか。

私にとって、「民衆文化」が存在するのかもしれないのを知ることが問題なんじゃありません。問題は、「民衆文化」について語る人たちがそう呼ぶものと似た何かがある、はたして現実のなかにあるのかどうか、それを知ることです。この問いに対する私の答えは「ノン」です。それはともかく、この危険な名称をとりまく混乱からすっぱり抜け出すためにはおそらく長い分析が必要でしょう。むしろ、私はそのままにしておきたいと思っただけです。私が、二言、三言、言葉で何か言いたいと思っても、これまでもほかで言ってきたことと同じように、よく分かっています。分らないでしようから。ですから、とどのつまりは、私の本を読んで下さるほうがましです……。

それでも、あなたは労働者階級のなかで文化「教養」へのかわわりと政治意識とを結びつける関係は十分に指摘されていますね。

考えてみると、人を政治化するという仕事は、文化「教養」を身につけたいという個人の思い入れと表裏をなすものなんです。こういう個人的な思い入れは人格的尊厳の復権とか人間的品位の回復だとして実際に体験されることが多かったと思います。そういったことは、戦闘的労働者が自分の学校時代についても持っている記憶にもはつきり見られます。私からすると、こうした学習ということによって解放をめざす企ては、実は人を疎外する効果も持っていると思うのです。ただし、(学校に行つて)この文化的品位とでもいうべきものをとり戻すことが、文化そのものを承認してしまうことを伴っており、実はその文化の名において数多くの支配の効果が及ぼされる限りにおいてです。だからといって、ここで、諸機関のうちでも学校の資格だけが問題だと思っただけではありません。正統

なら文化もそれを保有している人びとも、無条件で承認してしまうような——なぜなら無意識のうちに認めてしまうからです——一定の形式がいくつか思い浮かぶからです。一部の攻撃的な労働者階級至上主義者たちは、自分の無教養を恥じながら「正統」文化「教養」を承認してしまうことのうちに、あるいは単純化して言えば、そうした文化「教養」上の恥を自分で制御しきれない、まだ分析しきっていないことの中に、自分たちの存在基盤があることに気づいていないのではないのでしょうか。私にもまだ定かではありませんが、そう思えるのです。

しかし、あなたが本のなかで書いておられるように、学校制度へのかかわり方が変われば、文化に対するかわり方ばかりでなく、政治へのかかわり方も本質的に変化するのではありませんか。

その通りです。それに、私はこの本のなかで、そのような変化、とりわけ学歴のインフレとその価値低落の結果が、最も重要な変化、とりわけ政治の領域における変化の要因の一つである、ということをもつとはつきり書いておきました。わけても、教育制度の外においてまで表立つようになってきた反ヒエラルキー的な、あるいは反制度的でさえある諸性向のすべてを思い浮かべてみておられます。こうした性向の典型的な持ち主は、バカロレアをもった一般工たちであり、あるいは、いわばビュロクラシーの一般工とも言うべき新しいサラリーマン層なのです。また、共産党／新左翼あるいはCGT／CFDT⁽⁶⁾といった表面化している対立の底に、さらには、おそらくこんにちあらゆる組織体を引き裂いているさまざまな傾向の葛藤の底に、世代間の対立という形で翻案されることの多い、学校制度に対する異なったかかわり方によるさまざまな結果を再発見できるだろうと考えてみておられます。しかし、こうした直観をはつきりさせるためには、いつでもできるとは限らない経験的分析を、ぜひともする必要があります。

(5) Marcel Bigeard (1916—) 第二次大戦に志願兵として参加。のちインドシナ戦争で有名となり、中将にまで昇進し、国防大臣補佐となつた。こゝは「叩きあげの英雄」。

(6) CGT Confédération générale du travail 「労働総同盟」。一八九五年創設、共産党系で、組合員は一六二万人と推定。CFDT Confédération française démocratique du travail 「フランス民主主義労働同盟」。一九六四年創設、社会党系、組合員は九六万人と推定。

しょう。

■ では、支配的な諸価値の強制に対する抵抗は、いったいどのようにして作られるのでしょうか。

ひよつとするとあなたをびつくりさせるかもしれないませんが、フランシス・ポンジュを引用してお答えしましょう。「そのとき、言葉に抵抗する技術を教えるということがきつと役に立つようになる。言いたいことしか言わない技術である。各人に自分独自のレトリックを基礎づける技術を教えるということは、まさしく喫緊の大事なのだ。」言葉に抵抗すること、言いたいことしか言わないことは、社会的な意味を満載した（たとえば二人の組合代表者の「サミット、会見」とか、『リベラシオン』紙でさえ、「すでに売られてしまった」ノルマンディ号やフランス号をいまでも「わが国の」船と語るように）、借り物の用語によって語られる代わりに、語ることであり、自らも語られているスポークスマンによって語られる代わりに、語るということです。中立化され、婉曲化され、月並みにされた言葉に抵抗することとは、つまりはエリート官僚的な新しいレトリックの仰々しい陳腐さが作りだすことのすべてに對して、さらにまた、やれ動議だ、決議だ、政策綱領だ、計画だといって磨きをかけられ、ついには沈黙に行き着くまで削りに削られた言葉に對して、反抗することです。内的・外的ともどもの検閲と妥協した産物である言語はすべて、押しつけという効果、思考する気力を奪いとる思考不在の強制という効果を行使するものです。

これまで、あまりにも現実がこうなんだからというアリバイを使わず、あるいは「大衆に理解される」というデマゴグ的な気配りをしすぎたために、分析すべきところをスローガンで代用してしまったのですね。そんなことをすれば、いつもすべてを単純化するという代償を、極端な省略主義という代償を払うことで終わってしまい、あるいは他人にそれを支払わせることで終わってしまうと思うのです。

■ そうすると、知識人のはたすべき役割とは何なのでしょうか。

それはもうはつきりしています。装置の言葉が蔽い尽くし、装置という怪物が生んだ現実、その現実の理論的分

析が欠如しているのです、要するに理論が不在なのです。スローガンや激しい呪詛は、あらゆる形のテロリズムに行き着きます。もちろん、私は社会的現実の厳密かつ複雑な分析がありさえすれば、あらゆる形のテロリズムや全体主義への偏向から免がれるに足りる、などと考えるほどナイーブではないつもりです。けれども、こういった分析の不在が勝手な行動に余地を残していることは確かです。これこそが、当世はやりの反科学主義、その新しいイデオログたちを丸々と太らせてきた反科学主義に逆らって、私が科学を擁護し、それが結果として社会的世界に關するよりよい理解をもたらすがゆえに理論を擁護する理由なのです。反啓蒙主義か科学主義か、という選択をしてはなりません。カール・クラウス⁽⁹⁾が言ったように「双方とも悪であるなら、私はほんのこれっぽっちもどちらかを選ぶことはお断りだ」と。

科学が権力を正当化する手段になってきていること、新しい指導者たちがシヤンス⁽⁹⁾ポや⁽⁹⁾ビジネス・スクール⁽¹⁰⁾で身

(7) Francis Ponge (1899-) フランスの詩人。日常的な事物を対象として取り上げ、人間の意識や感情にゆがめられない事物本来の姿を求め、そこから従来の言語の革新に道を拓いた。サルトルは彼の詩を「自然の現象学」と呼んだ。

(8) Karl Kraus (1874-1936) オーストリアの批評家・作家。詩、戯曲、翻訳、小説、音楽の各分野で活躍。雑誌「炬火」を発行し、ウィーンの上流社会、オーストリアの政治、ドイツの教養人を批判。ヴィトゲンシュタイン、アドルノ、シエンベルクらの前衛音楽サークルなど、各方面の知識人に大きな影響を与えた。

(9) Sciences Po 現在の国立政治学院 Institut national des sciences politiques の略称。一八七一年にエミール・ブトミーが政・財界の支持を得て創設した私立の高級官僚養成学校 Ecole libre des sciences politiques がその前身。第三共和政の「リベラル」な高級官僚養成で実績をあげる。第二次大戦後に国立のグラント・ゼコールの一つとして再編され Institut d'études politiques と改称したが、のち現行名称に改められ、国立行政学院 ENA への登竜門として著名である。いまは全国で七つの主要都市に設けられているが、歴史的にみてパリのそれが代表的。なお8章の註(2) (二二五ページ)を参照。

(10) Business Schools 企業のエリート幹部の実学的養成をめざすアメリカのハーバード・ビジネス・スクールが念頭におかれている（フランスからも留学生が多い）。それに相当するフランスのグラント・ゼコールの一つとしてパリ商工会議所によって一八八一年に創設された高等商業学校 Ecole des hautes études commerciales (通称HEC) が著名。

につけてきた政治・経済学という仮象の名において統治していることをちよつとも見れば、ロマンチックで後退的な反科学主義など導かれるはずがありません。支配的なイデオロギーのなかでは、この反科学主義でさえ堂々と公言された科学への信仰といつても共存しているのです。むしろ、科学的であると同時に政治的な新しい精神、さまざまな検閲から自由であるからこそその解放の精神、そのための諸条件を創り出すことこそが緊要なのです。

しかし、そんなことをすれば、再び言語の障壁を作り出す恐れがありませんか。

私の目標は、「社会的世界だなんて大したことはないさ」と言わせないように手を貸すことなんです。かつて、自分が作曲するのは人びとがもはや音楽を書けなくなったからだ、とシェーンベルクが言ったそうですが、私が書くのは、まず第一に言葉をもっている人びと、スポークスマンといった人びとが、社会的世界に関する外見だけは音楽もどきの騒音を、二度と作り出せないようにするためです。

他方、フランシス・ポンジュが言ったように、各自に自分固有のレトリックの土台を作る手段を与えること、自分独自の真のスポークスマンであるための、また、語られる代わりに語るための手段を各自に与えることについては、それこそ「まったきスポークスマンたれ」という大望を与えるべきでしょう。このスポークスマンとは、自分の仕事の計画を自身の絶滅に捧げるような者とはまったく別人であろうことは疑いを入れません。いい夢を見たついでいいでしょう、一度だけは……。

2 お邪魔な科学

いちばんはつきりした質問から始めましょう。社会諸科学、とりわけ社会学は本当に科学なんでしょうか。あなたが科学性を要求するのを感じておられるのはどうしてなのでしょう。

私は社会学が科学というものを定義する特性をすべて備えていると思います。しかし、それはどの程度までか、そこが問題なんです。それに対する答えは社会学者によってひどく違います。ただ、私が言えることは、自ら社会学者であると言い、自らそう信じている人たちがたくさんいること、私はと言えば、正直なところそう認めることにいくらか苦労をしているというところでしょう。いずれにしても、社会学がその前史から抜け出て久しい、つまりは世上よくそれと同一視されることが多かった社会哲学の誇大理論の時代を抜けてから久しいわけですし、その名にふさわしい社会学者のすべてはいろいろな概念、方法、検証手続といった既得の共有資本について意見が一致しています。しかし、はつきりした社会的な理由からしても、——さらに社会学は学問の避難所みたいな役割

ピエール・チュイリエとの対談。「ラ・ルシエ
ルシュ」誌、一九八〇年六月、七三八〜四三
ページ。

監訳者紹介

田原音和（たはら・おとより）

1927年富山県に生まれる。東北大学教授を経て、現在、東洋大学社会学部教授。専攻・社会学、教育社会学。著書に『歴史のなかの社会学』木鐸社、訳書にエミール・デュルケーム『社会分業論』青木書店などがある。

共訳者紹介

安田 尚（やすだ・たかし）

1948年生まれ、上越教育大学学校教育学部助教授

佐藤康行（さとう・やすゆき）

1953年生まれ、新潟大学人文学部助教授

小松田儀貞（こまつだ・よしさだ）

1960年生まれ、富士大学経済学部専任講師

水島和則（みずしま・かずのり）

1962年生まれ、東北大学教育学部助手

加藤眞義（かとう・まさよし）

1964年生まれ、東北大学大学院文学研究科博士課程

社会学の社会学

1991年4月25日 初版第1刷発行©

監訳者 田原音和

発行者 藤原良雄

発行所 株式会社 藤原書店

〒162 東京都新宿区市谷柳町20

電話 03(5379)0301

FAX 03(5379)0440

振替 東京6-17013

印刷 イフ・フォーラム 製本 河上製本所

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに表示しております

Printed in Japan
ISBN4-938661-23-3

